

串本海中公園 マリンパビリオン

2002. 5

Vol. 31, No. 3

**ヒジキ***Sargassum fusiformis*

体は短い円柱状の茎と、その先端から出る直立する枝からなる。枝につく葉は多肉質で水滴型あるいはそれを引き延ばしたような独特の形をしており、他のホンダワラ類との区別は容易である。根は細い繊維状で基盤の上に重なるように広がる。ヒジキはその独特の形態からこれまで独立した属とされ *Hijikia fusiformis* の学名が長らく使われてきたが、分子系統の研究結果によりホンダワラ類との類似が示され、最近では *Sargassum* の属名が使われることが多くなった。特異な形状の葉は形態変異が大きく、南の地域に行くほど平たくなって周囲に鋸歯ができ、北の地域に行くほど円柱状になるが、串本では両方の形態が見られる。高さは1m以上になる。重要な水産物で鯖浦では冬から初夏に生育し、4月下旬から5月初旬に漁が解禁されて刈り取られ出荷される。写真は鯖浦地先で干出した状態のもの。コンブ目。

S.U

串本海中公園センター

串本のサンゴ群集 (8) 双島みののうち②
双島でのリーフチェック結果とサンゴ群集
野村恵一、串本リーフチェックチーム

前回 (Vol. 30, No. 12) では、串本町双島みののうちの大規模なハナガササンゴ群落を紹介した。今回は、当海域で毎年実施されているリーフチェックの調査結果とサンゴ群集について紹介したい。

リーフチェックは、一般参加により世界的規模で毎年実施される、有名なサンゴ礁調査である。国内には約 15 の調査地点があり、その多くはサンゴ礁域に集中するが、本州にも串本と静岡に地点がある。各調査チームはリーダー (1 名、地元の有志になる場合が多い)、科学者 (1 名)、調査員 (10 名前後) で組織される。調査は水深 3m 帯と、10m 帯の 2 ヶ所にそれぞれ 100m のラインを敷き、ライン下 (底質) もしくはライン 5m 幅 (基準種) の出現量を記録する方法で行われる。調査の主眼はサンゴ群集そのものより、サンゴ礁生物に対する人為攪乱の影響度 (特に乱獲によるサンゴ礁生物の減少度) の把握に置かれ、各地点のデータはリーフチェック財団 (米国) で集計・評価される。本調査は、一般者を啓蒙する意義の高いイベントであるが、代表的な熱帯種を基準とした世界一律評価は、サンゴ礁分布の縁辺に当たる日本海域、特に本土海域では無理がある。

みののうちでのリーフチェックは一昨年から実施され、私は昨年からチーム科学者として協力しているが、協力にあたってどうしても変革したいことがあった。それは、地域の環境の評価が可能な新基準種の導入である。つまり、希少な熱帯性基準種を用いても当地の環境を評価することは不可能であり、それを行うためには当地を代表する種、すなわち普通種が選択されなければならないからである。そこで、昨年は、リーフチェックを達成するための従来の世界基準種に、串本基準種が新たに加えられて調査が実施された。

表 1 に、昨年のリーフチェックの調査結果を

示す。調査種 (類も含める) は、世界基準種 15 種、串本基準種 16 種の合計 31 種で、世界基準種のほとんどは、通常串本では見られないものばかりである。串本基準種は基本的に普通種が選ばれているため、どれも出現個体数が多く、特に、ソラスズメダイ、クロホシイシモチ、ナガウニ類は数百個体が出現し、計数に労力を要した。なお、串本基準種の中には出現個体数が少ない種も含まれている。これらは、漁獲圧の高い地域代表種 (ブダイ、カサゴ、ウツボ、ギンタカハマ)、もしくは三宅島調査との協調比較種 (イトヒキベラ、ボウシュウボラ) という特性により選択されたものである。

次に当地のサンゴ群集について簡単に記す。群集調査は、リーフチェックで敷いたラインを併用して、ライントランゼクト法とライン周囲の目視観察によった。調査結果を表 2 に示す。3m 帯のサンゴ被度は 66.4 % で、優占上位 3 種はクシハダミドリイシ (56.3 %)、オヤユビ状ミドリイシ (3.0 %)、トゲキクメイシ類 (2.9 %) であった。一方、10m 帯のサンゴ被度は 34.4 % で、上位 3 種はキッカサンゴ (7.9 %)、トゲキクメイシ類 (5.8 %)、タカクキクメイシ (4.3 %) であった。総括すれば、浅所はクシハダミドリイシの高被度群生域、深所は 10 % を越える優占種を欠く中被度多種混成域となるが、周辺で観察された種を加えた相を比較すると、浅所の方が高い多様性が認められた。なお、本海域ではサンゴ食巻貝であるヒメシロレイシガイダマシが増殖中であり、浅所ではクシハダミドリイシの食害が 1 割近くに及んだ。

昨年の調査時点では、貝によるサンゴ食害が散見されたものの、当地の自然環境は良好に保たれているように見受けられた。従って、昨年の調査結果は、当地の海の健全度を判定する当座の標準値と目される。そして、今後、調査値が標準値に比して変化が少なければ、環境の変動が少ない、すなわち、健全度が高いと解釈され、逆に変化が大きければ何らかの環境攪乱が起こっていると考えることができる。

さて、この 6 月初めに、今年度の調査が実施

される。生物の変動量が少なく、「健全である」と評価されることを期待したいが、ヒメシロレイシガイダマシの動態、ガンガゼの増加による磯焼化、そして温暖化と安定を脅かす不安材料は多い。

最後に、串本リーフチェック調査データの転用を快く許可された、調査主催団体であるコーラルネットワークに御礼申し上げる。

表1. 2001年串本リーフチェック調査結果

○：世界基準種、●：串本基準種

対象種	出現個体数	
	3m帯(昨年)	10m帯(昨年)
魚類		
○チョウチョウウオ類全種	23(54)	4(19)
チョウチョウウオ	23(54?)	4(19?)
○フエダイ類全種	0(0)	0(0)
●ハタ類全種	0(0)	0(0)
○サラサハタ	0(0)	0(0)
●ブダイ類全種	0(0)	0(3)
アオブダイ	0(0)	0(0)
ブダイ	0(0)	0(3)
○カンムリブダイ	0(0)	0(0)
○メガネモチノウオ	0(0)	0(0)
●ニシキベラ	21(11)	1(6)
●カミナリベラ	12(8)	24(16)
●イトヒキベラ	0(0)	2(0)
●ホンソメワケベラ	9(-)	3(-)
●クマノミ	10(-)	9(-)
●ソラスズメダイ	412(-)	112(-)
●クロホシイシモチ	509(-)	0(-)
●カサゴ	4(-)	2(-)
○ウツボ類全種	4(-)	4(-)
ウツボ	3(-)	2(-)
ワカウツボ	0(-)	1(-)
トラウツボ	1(-)	1(-)
貝類		
○シャコガイ類全種	0(0)	0(0)
○ホラガイ	0(0)	0(0)
●ボウシュウボラ	2(-)	1(0)
●ギンタカハマガイ	24(-)	4(-)
●ニシキウズガイ	299(-)	200(-)
●ベニシリダカガイ	14(-)	35(-)
甲殻類		
○オトヒメエビ	0(0)	2(0)
○イセエビ類全種	0(1)	0(0)
イセエビ	0(1)	0(0)
棘皮類		
○オニヒトデ	0(0)	0(0)
○パイプウニ	0(0)	0(0)
○ガンガゼ類全種	148(108)	10(0)
●ナガウニ類全種	167(-)	805(-)
●ナマコ類全種	0(0)	9(1?)
○バイカナマコ	0(0)	0(0)
○シカクナマコ	0(0)	0(0)
トラフナマコ	0(0)	9(1?)
底質(被度%)		
○サンゴ類(ソフト含む)	66.5(70)	36(36.3)
○死イシサンゴ率	10(0)	3(0)

表2. リーフチェックポイントにおけるサンゴの出現状況

*:数値はライン下被度(%),+は周辺域での観察種

No.	種名	水深帯(範囲)	
		3m(1-6)	10m(7-15)
	(ソフトコーラル)	(0.3)	(2.6)
1	ムカシサンゴ	+	+
2	ハナヤサイサンゴ	+	+
3	ショウガサンゴ	+	
4	ミレボラコモンサンゴ	+	
5	デー・ナイボコモンサンゴ		+
6	アバタコモンサンゴ	+	+
7	コモンサンゴ	+	
8	トゲコモンサンゴ	+	
9	スギノキミドリイシ	0.2	
10	ホソエダミドリイシ	+	0.1
11	クシハダミドリイシ	56.3	1.1
12	エンタクミドリイシ	1.2	+
13	オヤユビ状ミドリイシ	3.0	0.4
14	ヒラニオウミドリイシ?		+
15	コエダミドリイシ?	+	
16	ミドリイシの一種	+	
17	センベアナサンゴ	0.2	0.4
18	フタマタハマサンゴ	0.1	0.5
19	ハナガササンゴ	+	+
20	アワサンゴの一種	+	
21	ベルベツトサンゴ	+	
22	ヤスリサンゴ	+	
23	ヤスリサンゴの一種	+	+
24	ハマシコロサンゴ	+	
25	キッカサンゴ	+	7.9
26	ウスカミサンゴ	+	0.5
27	ハナガタサンゴ	0.2	+
28	ヒメオオトゲキクメイシ	+	0.1
29	ヒラタオオトゲキクメイシ	+	0.1
30	オオトゲキクメイシ	+	+
31	アマクサオオトゲキクメイシ	+	+
32	カクオオトゲキクメイシ	+	+
33	イボサンゴ	+	1.4
34	タバネサンゴ	+	0.2
35	キクメイシ	0.2	2.0
36	アツキクメイシ	+	+
37	キクメイシの一種	0.1	0.6
38	オオカメノコキクメイシ	+	0.6
39	カメノコキクメイシ	+	0.1
40	ゴカクキクメイシ	+	0.1
41	カメノコキクメイシの一種	+	+
42	ウネカメノコキクメイシ	0.4	1.1
43	ミダレカメノコキクメイシ	0.1	+
44	コカメノコキクメイシの一種	0.1	2.3
45	チヂミノウサンゴ	1.1	3.4
46	オオナガラサンゴ	+	+
47	マルキクメイシ	+	
48	タカキクメイシ	0.4	4.3
49	コマルキクメイシ	+	1.0
50	ルリサンゴ	+	0.6
51	フカトゲキクメイシ	+	+
52	コトゲキクメイシ	+	+
53	トゲキクメイシ	+	+
	トゲキクメイシ類	2.9	5.8
54	ナガラハナサンゴ		+
55	オオスリバチサンゴ	+	+
観察種数(周囲含む)		51	44
ライン下サンゴ被度(%)		66.4	34.4

定置網で漁獲された魚種について (8)

2001年の結果

御前 洋

2001年1月5日から12月30日までに串本の魚市場に水揚げされた定置網漁獲種について報告する。対象とした定置網は串本町大島周辺3カ所に設置されているもので、漁獲物の殆どが魚市場に水揚げ後選別されるため、魚市場に出かけて魚種を調べた。なお、潮流や風向き、時化などで出漁出来ない定置網もあるが、3カ所の内いずれかで水揚げがあれば、その日の漁獲種として集計した。調査日数は121日であった。

漁獲種数

本年漁獲された魚種は308種、この中で表-1に示す15種はこれまで定置網での漁獲記録のない種であった。表中、ウグイ、マルコバンなど*印を付した7種は串本では初記録種、その中のミナミヒメジについては、日本産魚類検索(中坊他、2000)による分布域が高知県以南となっているところから、本種における分布北限の記録と思われる。なお、表中*印の付していない種は、エビ刺し網、一本釣り、延縄漁などで漁獲、または潜水で観察されている串本産既知種である。この度の報告で、定置網での漁獲種はこれまでの557種に新たに15種が加わり、572種となった。

漁獲率の高い魚種

漁獲された308魚種の内、全調査日を通して出現したものはなかった。次に魚種ごとの漁獲日数を月別に集計したところ、年間を通して漁獲された種はキンメドモドキ、ウミスズメ、ハリセンボンなど15種で、この中でウルメイワシ、ムツ、マアジ、ウスバハギなど9種は、魚市場の「競り」の対象とされる有用種であった。また年間漁獲率(漁獲日数/調査日数)の高かった魚種にはカワハギ・マアジ(93.4%)、ムツ(88.4%)、イサキ(84.3%)、キンメドモドキ(82.6%)、ウルメイワシ(79.3%)、ウスバハギ(75.2%)、カイワリ(74.4%)、ミナミハタンボ・ヒラソ

ウダ(69.4%)などが挙げられ、キンメドモドキ以外は「競り」の対象とされる有用種であった。これら年間漁獲率の高い魚種について過去の記録と比較してみると、順位の変動は多少あるもののほぼ毎年列挙される常連種であった。なお一昨年まで、毎月漁獲されしかも年間漁獲率の高かったカタクチイワシが、昨年は減少し(84.5%→56.7%)、代わりにキビナゴが上位を占める(56%→77.8%)という順位の変動があった。しかし本年は、キビナゴの年間漁獲率が下降(68.6%)、逆にカタクチイワシのそれは上昇(62%)したものの、両者の順位は変わらなかった。ところが、キビナゴを上回る年間漁獲率を示す魚種が現れた。それは上述した魚種の中のカイワリとヒラソウダの2種であるが、両者の昨年以前の年間漁獲率は50%以下を示していたものである。これらの変動の原因については、各魚種の資源変動並びに黒潮接岸の継続による潮流変化等が関係しているものと思われるが、本調査の結果のみからは言及出来ない。

表-1. 2001年に定置網で新たに漁獲された魚種

1. サカタザメ科	コモンサカタザメ
2. コイ科	*ウグイ
3. テンジクダイ科	ツマグロイシモチ
4. アジ科	*マルコバン
5. フェフキダイ科	イソフエフキ
6. ニベ科	*シログチ
7. ヒメジ科	*ミナミヒメジ
8. エボシダイ科	エボシダイ
9.	スジハナビラウオ
10. イソギンボ科	イソギンボ
11. カマス科	*イブリカマス
12. モンガラハギ科	イソモンガラ
13. ハコフグ科	テングハコフグ
14. フグ科	*カイユウセンニンフグ
15.	*ケショウフグ

* : 串本初記録種

漁獲生物特記事項

定置網で漁獲されたもので記録に値すると思われるものを月を追って列挙する。

(1) 1月30日、体長422mmのケショウフグ1

個体が捕獲され、水族館に収容されたが、網ズレがひどく2月5日死亡した。本種は串本では初記録であった。

(2) 2月16日、体長300mmのテングハコフグ1個体が捕獲され、水族館に収容されたが、網ズレによる目の白濁及び網揚げ時に腹腔内に入った空気が抜け切れず死亡した。テングハコフグは1989年10月21日に搬入された体長250mmの個体以後これまでに5個体が搬入されているが、いずれもイセエビ刺し網に羅網したもので、定置網での捕獲はなかった。現在、1994年12月7日に搬入された体長250mmの個体が大水槽で展示されている。

(3) 3月6日に1個体、5月24日に2個体のマルコバン（体長約450mm）が捕獲された。この内5月に捕獲された2個体の内の1個体は網ズレにより体表がただれ、1週間後に死亡したが、残りの2個体はサメやエイ類と共に大型アジ類が展示されているトンネル式外洋大水槽で飼育展示されている。

(4) 3月12日、全長2400mmのイタチザメが捕獲され当館に搬入、トンネル式外洋大水槽に収容された。餌として解凍したムロアジやスルメイカをはじめ、マアジ、ウイジンドウイカ等定置網で漁獲された生の物を餌付け棒の先に刺して与えたが、いずれの餌にも餌付かず、4月1日死亡した。

(5) 5月6日、殻長60mmのアオイガイ1個体、9日には殻長33mmのタコブネと殻長30mmのアオイガイ各1個体が捕獲されたが、いずれも死亡していた。

(6) 7月7日、体長52mmのツバメコノシロ1個体が捕獲された。これまでに体長100mm以上の捕獲例は毎年あるが100mm以下の幼魚の捕獲例は初めてなので簡単に紹介したい。発見当初胸鰭が大きかったのでトビウオの幼魚かと思われたが、体型が側扁型で吻端がやや突出していること、5対の胸鰭遊離軟条があることなどからツバメコノシロの仲間であると断定した。水族館に持ち帰り詳細に調べた結果、胸鰭遊離軟条が5対であるところからツバメコノシ

ロと同定した。なお近似種のナンヨウアゴナシとは遊離軟条が6対であることで区別した。本個体の体色は銀白色の地に頭部と第1背鰭から第2背鰭にかけての体側部及び体後部が黒褐色、また白色の胸鰭遊離軟条を除く各鰭も黒褐色であるが第2背鰭と臀鰭の後端は淡白色であった。また胸鰭は大きくその先端は第2背鰭基底中央に達していた。これまでの入手個体は一律に銀白色、胸鰭は第1背鰭基底中央付近までであったところから、成長と共に黒褐色は消失し、胸鰭も小さく変態していくものと推測された。

(7) 8月17日、外套長150mmのソデイカ1個体が捕獲されたが、既に死亡していた。過去に定置網では2個体が水揚げされているが、いずれも外套長600mm以上と大きかった。また沖縄本島や八重山諸島の魚市場で水揚げされているものも大型のもの（小型個体は破棄?）であったと記憶する。小型個体の捕獲は記録に値する。

(8) 9月13日、体長157mmのミナミヒメジ1個体が捕獲された。体色は銀白色の地に、頭部後方から尾柄に向かって4本の暗色縦帯がある、第1背鰭は透明でその先端は黒い、また尾鰭両葉には9本の暗色帯がありその内の下葉中央の暗色帯の幅が他のものよりも広がっている。また前鋤骨と口蓋骨には絨毛状の歯がある、第2背鰭基底前半部は小鱗で覆われている事などから本種と同定した。中坊他(2000)による本種の分布は高知県以南となっており、本種の分布北限の記録となる。

(9) 11月26日、体長170mmのユリサヨリ1個体が捕獲された。本個体は下顎の一部が欠損していたが、吻背面に鱗がある、鼻孔後縁に骨質隆起縁がある、涙骨上の眼前管に分枝管がある、上顎は長くその幅の1.9倍である。また臀鰭基底後端は背鰭基底後端より後方に位置する事などから本種と同定した。中坊他(2000年)による本種の分布は沖縄以南とされる種で、1998年10月26日（体長200mm）に次ぐ2個体目である。

八重山諸島黒島における ヒメウミガメの漂着について

小寺 昌彦

2000 年 5 月から黒島にある八重山海中公園研究所に赴任し、2002 年 3 月に帰任した。財団法人海中公園センターが 2002 年 3 月 31 日をもって解散することになり、串本から出向する最後の研究員として 2 年弱の間、八重山の海を見ながら毎日を過ごしてきた。さて、2001 年にはウミガメ類の漂着が以下の通り 5 回あった。1 例は観光客から研究所への連絡、4 例は島民からの連絡で、漂着情報を元に漂着個体の確認を行った。

- 1 例目：4 月 16 日、アオウミガメ、直最小甲長 51.8cm、直甲幅 42.0cm、推定体重 15kg、西ノ浜北端、死亡漂着、腐敗。
- 2 例目：8 月 18 日、タイマイ、直甲長約 72cm、甲幅体重不明、伊古棧橋-黒島港中間、死亡漂着、著しく腐敗。
- 3 例目：11 月 17 日、アオウミガメ、直最小甲長 50.7cm、直甲幅 43.0cm、推定体重 10kg、黒島港旧ホバー乗り場、死亡漂着、やや腐敗。
- 4 例目：12 月 23 日、アオウミガメ、直最小甲長 45.9cm、直甲幅、39.5cm、体重不明、伊古棧橋-黒島港中間、死亡漂着、腐敗。
- 5 例目：12 月 26 日、ヒメウミガメ、直最小甲長 57.4cm、直甲幅 52.5cm、体重 21.2kg、黒島港東、衰弱、左前肢欠損、左後肢途中から欠損。

黒島は日本の南西端に位置する八重山諸島のひとつで、島の周囲は約 12.9km、面積 9.83km、人口 200 人ほどの小さな島である。島の北側には石垣島西表島などに囲まれた石西礁湖が広がっている。10 月以降は北東の風が強い日が多く、石西礁湖内にある漂流物が島の北側の浜に打ち上がることが多い。見つかったウミガメ類も 1 例目を除き島の北側に打ち上がっている。

ところで、打ち上がったウミガメ類は 3 例が

アオウミガメで、残りはタイマイとヒメウミガメである。アオウミガメとタイマイは八重山諸島でも産卵が行われている種だが、ヒメウミガメは日本近海では産卵しないため、目にすることの少ない稀な種である。漂着したヒメウミガメは生きていたものの、左前肢が付け根からなく、左後肢も途中からなくなっていた。やせて衰弱していたので、体力を回復をさせるため研究所に持ち帰った。



図 1. 漂着したヒメウミガメ 左前肢がない



図 2. 同、左前肢断面 皮ができて始めている



図 3. 同、左後肢断面

本個体は背甲の右前部に藻類の付着が少ないこと(図4)から、左の前後肢が網に絡まったか、あるいはサメに手足を喰いちぎられる等の理由で体のバランスを失い、右前半身が斜めに浮いた状態が続いたことが想像される。また、傷口は中央部の皮が覆っていない部分から肉が見えることから(図2, 3)、手足を失ってからあまり日が経っていないことが想像された。なお、下顎にカメフジツボが付着していた(図5)が、これがいつ付着したものかは分からない。

収容した個体は、やや浮き気味だったものの、傾いて浮くことはなかったが、左前後肢がないために左に回るようにしか泳ぐことができなかった。ヒメウミガメは甲殻類を好んで食べるので、潮間帯で採集できる比較的大型のカニであるクマドリオウギガニとオオイワガニを生きたまま、そして冷凍処理したものを与えてみた。また、商店で購入したブラックタイガー(ウシエビ)も同時に与えた。水槽の水位を低くして、水底の餌を食べられるようにして様子を見たが、全く食べないので、収容4日後に強制給餌に切り替えた。強制給餌では、研究所で飼育しているウミガメ類の幼体に与えているヒラメ養殖用の配合飼料を水で柔らかくしたものを与えた。さらに、水温を25度前後まで上げた。

しかし、強制給餌を始めて3日がたった2002年1月3日の朝、死亡を確認した。解体したところ、胃内から圧縮された配合飼料が未消化のまま見つかった。死亡原因は漂流中の激しい衰弱によるものと思われるが、急激な強制給餌によってその寿命を縮めたことも否めない。

ウミガメ類は世界的に減少し続けており、全ての種が国際自然保護連合による絶滅のおそれのある動物種を示した「IUCN Red List of Threatened Animals (通称レッドリスト)」に近絶滅種または絶滅危惧種として掲載されている。減少の原因は、産卵を行う砂浜の減少や環境の変化(ウミガメにとっての悪化)、卵や親ウミガメの捕獲圧など様々だが、漁業による混獲が最も大きな脅威となっている。昨年黒島に漂着した5例のウミガメ類のうち、アオウミガ

メ3例は、体に大きな外傷がなく、前肢腋部に糸によって締め付けられたような傷が見られたことから、網などに絡まって溺死したと推定される。このような漂着例が数多く見られると、恵まれた自然条件に見える八重山の海でも、ウミガメ類にとっては決して恵まれていないように感じられる。世界中の海が…とは言わないが、せめて八重山の海はウミガメにとって棲みやすいところであって欲しいと思う。

最後になるが、財団法人海中公園センターの解散に伴い、八重山海中公園研究所はNPO法人日本ウミガメ協議会の運営によって、これまでと同様に八重山海中公園研究所としての活動を続けることになった。串本海中公園との直接の関連はなくなったが、八重山の海をフィールドとして研究し続け、そしてウミガメ類の保護に力を入れていく同研究所の活動に皆様のご理解ご協力をお願いしたい。



図4.背甲の右前部に藻類の付着が少ない

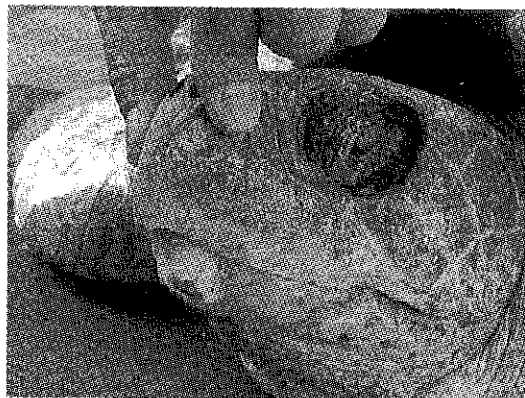


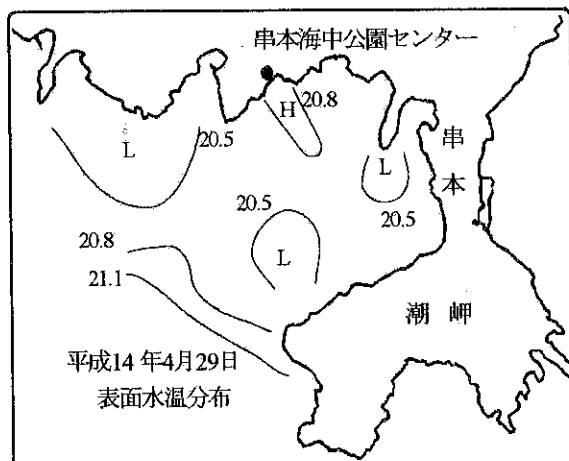
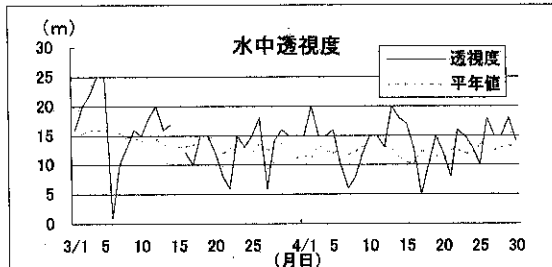
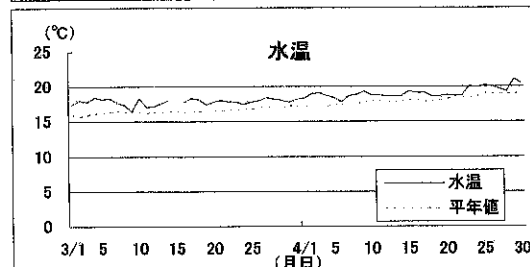
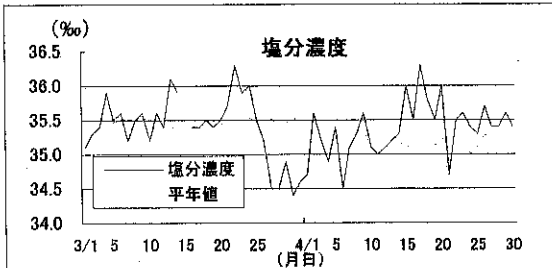
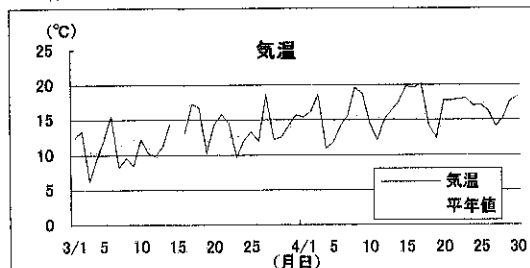
図5.下顎に付着したカメフジツボ

鏡浦の海から 宇井 晋介

平均値	3月	気温12.5℃	水温17.8℃	塩分濃度35.3‰	水中透視度14.6m
	4月	気温15.3℃	水温18.4℃	塩分濃度35.4‰	水中透視度13.7m

春から初夏の大潮は昼潮としては一年で一番潮が引く。そんな時、普段は見えない「海底」を歩くのは、何とも不思議な気分だ。いつもは波に揺られているホンダワラ類が、まるで柔らかい布団のように磯をすっぽりと覆っている。強い日差しに照らされた磯に立ちこめる磯の香りもいつもより強烈で、むせかえる程である。この「磯の香り」とは、イコール海藻の香りである。ところで、この海藻の香りは、海藻の作り出す揮発性の「匂い物質」であることがわかっており、ホンダワラ類に代表される褐藻類の幾つかの「匂い物質」は雄の精子を引きつける性フェロモンとして働くという。陸上植物のう

ち花を咲かせるものは匂いを出して昆虫を引き寄せ受精するが、昆虫のいない海中では雌が直接雄の精子を引き寄せるのである。陸上植物の花粉は自力で移動する力を持たないが、海藻の精子は鞭毛を持ち、自力で遊泳できるからである。またこの物質は同時に精子の放出をうながす役目もする。確かに広大な海では、何らかの手立てを講じなければ、放出された精子は散り散りバラバラになってしまい、次世代は育たない。初夏の磯の香りがいつもより強烈だと感じるのは、潮位が特別低いとか日差しが強いからばかりではないのである。



マリンパビリオン Vol.31, No.3 通巻363号
一部100円 (年間購読料1,000円/送料含む)
印刷日 平成14年5月25日
発行日 平成14年5月31日
郵便振替口座番号: 00990-9-41351
口座名称: 串本海中公園マリンパビリオン
編集兼発行人
〒649-3514 和歌山県西牟婁郡串本町有田1157
(株) 串本海中公園センター
電話: 0735-62-4875 FAX: 0735-62-7170
<http://www.kushimoto.co.jp/>
印刷所 坂本印刷
串本町串本2481 Tel: 0735-62-0895